

第1回 鎌倉市深沢地区まちづくり方針実現化検討委員会 議事録

開催日時：平成30年11月20日（火）10時30分から12時まで

開催場所：鎌倉市役所 本庁舎全員協議会室

出席者：【委員】（50音順）

株式会社日本政策投資銀行 地域企画部次長兼課長 入江委員

慶應義塾大学 環境情報学部 准教授 大木委員

慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 特任教授 佐久間委員長

株式会社エミネクロス スポーツドクター（代表） 辻委員

関東学院大学 人間共生学部共生デザイン学科 准教授 日高副委員長

【オブザーバー】

神奈川県政策局ヘルスケア・ニューフロンティア推進本部室 金井統括官

【鎌倉市】

行政経営部 公的不動産活用課 関沢担当課長

まちづくり計画部 前田部長 宇高次長

深沢地域整備課 山戸担当課長、杉浦担当課長、大江課長補佐、西村、大野

【傍聴者】6名

○議事

次第3（1）委員長及び副委員長互選、次第3（2）諮問を経た後、次第3（3）～（5）について事務局から説明を行った。各議題について意見交換を行い、最後に次第4その他について説明を行った。

〔議論の概要〕

■次第3 議事要旨

【次第3（3）深沢地域整備事業の概要及びこれまでの検討経過、次第3（4）今後の進め方について】

（事務局） 次第3（3）、次第3（4）の説明。

（佐久間委員長）第1回目の委員会ですので、それぞれの委員の皆様が、ここは大事だという視点ですとか、社会情勢の変化を踏まえたまちづくりの考え方、とくに鎌倉あるいは深沢というエリアのまちづくりという命題でどういった視点を持って捉えていくべきか等について、今のお考えをお話頂ければと思います。

まず、昨年度アドバイザーとして関わりの深い委員の方からご意見を伺いたいと思いますので、日高委員より、まちづくり全般に関しての視点から、あるいはこの委員会の中でどういった視点を大事にしていきたいか、これまでの議論の中でさらに深めたい点、新しく入れたい点を含め、ご指摘をお願いします。

（日高委員）建築の設計とまちづくりを専門としており、所属している関東学院大学ではコミュニティデザインという少しソフトの面から研究をしています。

前職で、東大の柏キャンパスにおりまして、そこで柏の葉キャンパスタウン、つくばエクスプレスの新駅とその周辺エリアを対象に、更地にしたところにまちを作るこ

とに関わりました。その立上げの段階で、まちづくり施設、UDCKを設計し、立ち上げにかかわった経験から申しますと、10年、20年という長期のまちづくりになるということが今回も考えられます。そういう長いまちづくりのプロセスについて、その都度、何が大事かと言うことを考えていくことがまずひとつ重要ではないでしょうか。各段階で一番適切な方向付け、決定をしていく仕組み・体制作りを中心に、取り組みたいです。

柏の葉は、LEED承認の日本初のプラチナという非常に高い評価を得ましたが、実際に評価軸で評価が高かった点としては、まちの賑わい、歩きたくなるまちとか、今回のウェルネスというテーマに近いところですが、しかし、実際に柏の葉キャンパス周辺地域を歩くと、実はまだまだそんなに歩いて楽しいまちではない。街区も大きいし、超高層ビルもあるし、北関東の平野なので時期によっては北風も強い、旧鎌倉地域のほうがよほど歩きたいまちとして成熟した魅力を持っていると思います。やはり新しくまちを作ることの難しさ、白紙から作ろうとするものの傲慢さを身に染みて感じているところです。時間をかけてまちが作られ、だんだん成熟していく過程ですとか、自然発生的に出来てきたようなまちの面白さ、そういったものが大事だと思うと同時に、今回のゼロから作る土地利用計画に一抹の不安はあります。出来るだけそこに、冷たさ、寒々しさが生じない計画にしていきたいです。

(佐久間委員長) では私からも意見を述べたいと思います。昨年度の検討においてはアドバイザー会議の座長をしましたが、深沢において実現していきたいまちづくりとして、鎌倉市はSDGs未来都市に選ばれており、SDGsに基づくまちづくり、ハード面、ソフト面の全てにおいて、SDGs未来都市がまくらがやる新しいまちづくりに相応しいと皆さんに思ってもらえるような視点を委員会の色々な議論の中で入れていきたいと考えています。SDGsの一番素晴らしい点は「誰も取り残さない」ということです。取り残されるような人や組織、コミュニティが出ないようなまちづくり、それでいて、新しい。市が特に「健康」「スポーツ」「産業」の3点に重点を置いていると説明しましたが、そういったこともしっかりと実現できるように、魅力があふれて、人が来たがって困るくらい魅力のあるまちにできれば、長い期間かけている深沢エリアの方々も報われるのではないかと考えています。

続いて、辻先生から、ぜひ意気込み含めて、お話をお願い致します。

(辻委員) スポーツドクターをしています。もともとは内科医をしていました。一般的にはスポーツ選手の怪我を見るというイメージかと思いますが、スポーツの価値を使った社会作りという仕事をしたいということで、今はスポーツ心理学を含め、プロチームや行政のスポーツコンサルタントを行い、スポーツを使った世の中のクオリティオブライフの向上につながる活動を様々な場所で行っています。

今回の大きなテーマがウェルネスで、スポーツが今回の大きな柱になっています。スポーツには心理的障壁がありまして、素晴らしいと言われる一方で、固定化されたスポーツの概念もあります。極端に言うと、しんどくて、辛くて、汚いといったものです。SDGsのテーマも取り残されませんが、昨今のスポーツ指導のハラスメントといったものもあり、スポーツそのものが持つ価値を根本的に意識改革していかなないと、市長も市も望んでいるスポーツでまちが賑わうとか、多くの人が集まるという

発想が、市民から遠くなってしまう危惧もあります。

今回拝命した委員の役割として、スポーツの文化性という面で、欧米のスポーツ文化論を様々紐解きますと、オリンピックの発祥もそうですが、スポーツは文化という心身の健康をより豊かにし、平和なまちをつくるためにスポーツは存在しているという発想があります。そのスポーツの文化性が持つ、医療性、芸術性、コミュニケーション性、教育性が、世界中で言われているスポーツの文化の4つの柱です。この中で医療性のキーワードで、スポーツで元気になろうという話と、芸術性に関して、スポーツで感動を作ろう、そしてスポーツのコミュニティ性で、仲間を増やしましょう、そして教育性、スポーツで人間として成長を感じるようなスポーツのあり方を作ろうということで、元気、感動、仲間、成長、というキーワードの中で、このまちづくりのコンセプトに何かしら協力できればと思いますし、スポーツって本当に魅力的だなという一方で、すごく心理的な障壁が出やすいので、その障壁を下げられるような、アイデアが出せればと思っています。

それと文化のまち鎌倉なので、スポーツの文化性との融合がこのまちづくりの中で表現できればと考えています。今、どのまちもスポーツが大事だなとか、Jリーグが出来たり、色々なまちにスタジアム構想はありますが、まだなんとなく競技スポーツの勝ち負けに一喜一憂し、スポーツビジネスが中心になってしまっているのもう少しスポーツの根本的コンセプトが表現できるようなまちづくりが出来ればと期待しています。微力ながら少しでもお役に立ちたいですし、それが出来ればこれから東京オリンピックが終わった後に、日本がどうするかとなった時の大きなロールモデルにすらなっていくと思うし、そうなることを願っていますし、そうならなくてははいけないと思っています。

(佐久間委員長) 元気、感動、仲間、成長という、ああそうだなと素直に感じられる、非常にいい言葉だと思います。そういうまちが作れば、私達の役割も果たせると考えます。

続いて昨年度アドバイザーとして関わりのあった福岡委員の意見を事前に頂いているようなので、事務局からご紹介します。

(事務局) <福岡委員のコメント紹介>

これからのまちづくりという非常に広い話ですが、まず今後の検討の中で、深沢地域について、都市的な視点から周辺の人口動態やモノレール・JR沿線周辺地域の状況、工場の撤退など縮退の状況など、場所に紐づいた視座から検討を進めるべきだと思います。都市計画の色ぬりだけではなく、具体的な空間像を伴いながら議論を進めることが重要。また、周辺に三菱、武田薬品、東レの研究所など知識（ナレッジ）の集積もあります。深沢地域が潜在的にもつ資源（ストック）や自然条件なども意識した上で検討を進めていく必要があります。

その中で、昨年の検討の中でも明確になっていませんが、「鎌倉らしさとは何か」ということや、「鎌倉における健康やスポーツというのは何か」ということを引き続き真剣に考えていかないとはいけません。スタジアムやプロ・スポーツの誘致など外力頼りのまちだけでは成立しません。物理的に体を動かす健康だけでなく、心の健康や精神的な面の健康ということもあると思いますし、市内の自然や歩きやすい場所とのネットワークなどに結び付けながら考える必要もあります。深沢がよくなることで、旧鎌

倉地区や、市庁舎の将来的な跡地、鎌倉の大きいビジョンとリンクすることはすごく大切なことだと思います。鎌倉市自身もこのチャンスを活かすために庁内で横串をさして徹底的に議論をして機運を高める必要があるでしょう。また、鎌倉市はSDGsの未来都市になっていますが、小さい取り組みだけではなく、新しい都市開発は必要ないという議論もある中で、どういうふうはこのまちを住み続けられる、持続可能な都市のモデルにしていくかということが描けないといけないと思います。例えば、SDGsの3「すべての人に健康と福祉を」や、11の「住み続けられるまちづくりを」、13「気候変動に具体的な対策を」など鎌倉市として明確な目標を設定した上で戦略的に取り組み必要があります。

大きな課題のひとつとして、土地利用について、現在の土地利用計画は、道路と建物を基調にしたような、旧来的なまち割りが出来ていると感じています。すこし現実的にすり寄せた上で、歩きやすさとか、公園や公開空地、道路の縮減、駐車場の配置や歩行者空間の配置、低層部のつくりなどをうまく考えることで、鎌倉らしい形が出せないかを感じています。また、どんな市民でもどんな世代の方たちでも、健康にアクセスできる第一歩として、歩き易さ、ウォーカビリティというものがあると思いますが、データを取ることに加えて、自然に触れたり、自然の中で活動したりして、そこに住んでいる人の住みやすさや幸福度が上がるような、そういう健康がなんなのかを目指すべきだと考えます。また、街路、歩行者空間、道路、公開空地の設計という部分で、道路は必ず入ってきますが、そのつくり方でだいぶまちの骨格も変わるかと思っています。土地利用計画見直しについても、具体的な場所の質や性能から積み上げて都市像に帰結させる形でもう少し議論ができたらと思います。例えば、道路の配分としても、車と自転車空間、歩行者道の配分でだいぶ変えられるのではないのでしょうか。また、駐車場の配置、道路の構造で、どういうふうにもちの中で歩きやすさを保つのかはすごく大事なので、例えば駐車場を周りに配置して真ん中を少し歩きやすくということもあると思いますし、真ん中の道路は搬入の車両や緊急車両は入れるようにしておくが、少し車が走りにくいようにしておいて、朝と夜だけ通れるようにするなどの手法もあります。ヨーロッパのまちはだいたいそういうふうになっています。より柔軟で多機能型のコンパクトな都市を構想すべきです。さらに最初から広場的に道路をつくるなど、発想次第で色々できるのではないかと考えています。

また、公園というと今までは、単体の配置と面積だけを出す場合が多かったですが、公園というのはその周辺に配置される建物と、公共空間の関係によって変わってくると思います。中央に配置するというやりかたもあると思いますが、他にもいろいろなやり方があると思いますので、最重要課題として検討するべきだと思います。パークPFIなどの手法や、将来的には、公園の隣地に立地する建物などでBID的に管理運営費用を担ったりする仕組みも考えることができるでしょう。

調整池について、グリーンインフラの観点で考えると、ハードインフラの費用を減ずるため、もしくはまちのレジリエンスを高める意味でも、例えば公園と調整池を一体的に中央に配置して、調整池も増水時以外は市民もアクセスできるようにすることなどができます。迷惑施設のように思われているところも、いろいろなものと組み合わせ、最初から検討して仕込んでおくことでずいぶん変わると思います。柏市など

では既にこのような取り組みが具現化されています。

最後に、このような鎌倉の新しい都市のビジョンを鎌倉市民のみなさんに知っていただき、意見をより広く求める姿勢も重要です。本委員会のアウトプットを文字だけの報告書とパブコメで終えるのではなく、誰が読んでもわかりやすいような深沢の都市、デザインビジョンブックみたいなものが出せるといいと考えています。

(佐久間委員長) 福岡先生らしいご意見であったと感じます。昨年度の検討の中で、ウォーカビリティとか公園、市民への伝え方について議論をしていましたので、アドバイザーとして話し合った中から出てきた自然なご意見であったと捉えます。

では、今の福岡先生からのコメントにレジリエンスという話が出ましたが、防災の観点を含めて大木委員からご意見、ご提言をお願いいたします。

(大木委員) 慶応大学の大木です。私は固体地球物理学という地震学を専門に博士号をとりまして、今はSFCでソフトから見た防災、例えばハードウェアである防潮堤をやすやすと津波が乗り越え、その後引いていかないということが東日本大震災で見られたわけですが、それに対して人間が高台へ避難することで人的被害は免れることが出来るということで、防災教育とかそういったソフト対策での地震防災の研究を専門にしています。ドクターを取得した後、追浜にあるJAMSTEC(海洋研究開発機構)で研究員をし、その後、サンディエゴのスクリプス海洋学研究所にいました。追浜もサンディエゴも、歩けないまちで、空が広く海も近いですが、なにか歩くと疲れる認識がありまして、自転車だと普通ですが歩くと疲れる印象でした。私が、足立区の下町のすぐに道が突き当たりになるような、ある意味歩いていて楽しいところの出身で、追浜もサンディエゴも一区画が非常に大きくて景色が変わらない、何区画歩いたか分からないくらい工場ばかりで景色が変わらないところなので歩きにくかったのでは、と当時思っていたことを日高委員と福岡委員のコメントで思い出しました。

それからSDGsの話で、鎌倉は非常に観光に来る方が多いので、発災時にどのようにその人たちも残さずに命を助けられるか、そういうことを率先してできるまちのモデルとして鎌倉市は取組めるのではないかと思います。というのは、実際避難時に、誰かのために避難するほうがはるかに行動し易いということが研究でわかっているので、むしろ観光客に対しての先生として市民が率先して避難する、あるいは留まっていいということを指し示すアクションが取れるような市民に育てていく、そうすると結果的に市民も助かるというモデルになると感じています。

防災の観点から言いますと、震災からもうすぐ8年経ちまして、震災直後にある意味、神奈川県の設定もそうでしたが、津波ヒステリーのような状態に日本国民全部になっていて、海のない県からも津波の問い合わせがくるような状況でした。本当にヒステリックに津波のことばかり考えるような状況で、地震学者も二度と想定外は出さないために、過剰なことも言わざるを得ないような想定が出来ました。そこから8年経ちどうなっているかと言いますと、その状態でこれでもまだ危ないんじゃないかという方と、いやいや結局あんなのは来ないでしょ、8年もたったからもう忘れた、自分には関係ないという方の、二極化してしまったという印象でして、適正な防災意識を国民の誰もが持つような状態に結果的にはならなかったとこの8年間を振り返って思います。ですので、この場合、地域に関しても本当にこの状況で大丈夫なのか、川の

近くで大丈夫なのかというように過剰に心配される方のパブリックコメントと、それに対してのサイレントマジョリティというのが実はマジョリティではなくて、適正な状態にない、「いやいや大丈夫でしょ」という正常性バイアスのかかったような方と、過剰な心配をされている方に二極化していると思うので、それぞれに応じた、コミュニケーションを取れるようなことが出来ればと思っています。

(佐久間委員長) 観光客を含めて誰も取り残さないという視点は、鎌倉らしいと感じました。特に利他的な行動が結果的に自分を救うというのは、そういった形が出来れば新しい鎌倉の防災についてのソフト面において、大変価値があることだと思います。

続いて、PPP含め民間と事業者との関わりについて専門である入江委員よりご意見を頂きます。

(入江委員) 学者の先生や専門家の中に混じって、唯一文科系出身の銀行員でございます。そういう立ち位置の中で意見を申し上げたいと思います。

今回の再開発は、人口減少下の中で行われる、鎌倉ではほとんど初めての大型再開発になると思います。

しかも、三大都市圏ではない、ほっといても集積が期待される銀座とか日本橋とか、梅田の再開発とは違って、地方都市で大型再開発をやるというものです。人口減少下とはどういうことかということ、全体のパイが縮小していくから都市間競争が激化していく。そういう面でどういうふうにすべきかということが、右肩上がりだったこれまでとは経済環境が全く違うと思っております。

私は、3つのことを言いたいと思います。

1つは、既にあるものを活かすべきだということ。今回は全く白紙の下地の所から行われる大型再開発ということで、その中に公共施設の整備も出てきますが、それも公共施設等整備計画とリンクして、あるものは活かしていくことが大事だと思いますし、それが将来の財政負担を減らしていくものだと思います。それから、ハードだけでなくソフトも、今一度民間施設やノウハウ、歴史的な部分も含めて、オンリーワンとして、今あるものを探しだしそれを活かしてやっていく。今何があるのかということをもう一度見つめ直してやっていくことが大事だと思っています。

福岡先生のコメントには、もともと鎌倉や深沢には何があるのかということ、潜在的な資源を考えた上で、それと調和的にまちづくりを検討していくことが大事だとありましたが、私も同じ考えでございます。

2つ目に、様々な連携を重視するということです。連携と言いますのは、先程事務局の説明のなかで、市役所内部の部署間の連携を高めていくとありましたが、勿論それは非常に大事なことです。行政は往々にして縦割りになるので、そういうことがないようにということもあります。しかし、それ以外にも色々なものがありまして、例えば自治体間での連携があると思います。例えば隣の藤沢市との間でもそうだと思いますし、あるいは隣でなくても、鉄道もあるので、人々が鉄道で行き来できて、通勤通学、買い物をしている自治体との連携もあるでしょうし、姉妹都市との連携もあるでしょう。色々なところと連携して、お互いの機能を分担していくということが大事だと思います。

それから連携というと、公民連携も大事なことでして、本件でも企業はどういう条

件ならば進んでまちづくりに参加するだろうかという、マーケットサウンディングというものも含めてやっていく必要があって、まず基本的に企業はエコノミクス（経済性）が確保できないとやらないと思います。行政や有識者だけで出来合いの計画を作って、決まった内容に添って最後に事業者を募集するというだけでなく、早い段階から双方向にキャッチボールをしながら計画を立てて行く必要があると思います。今は時代の展開が早いわけですが、変化に敏感な民間企業が、どういうことに価値観を置いており、どういうことが改善されれば商機を見出していくのかという視点を、計画策定の完了の前に予め知っておくことが大事だと思います。さらに当地にはたくさんの企業立地を背景に、企業を卒業されたOB、OGなど、民度の高い市民がたくさんいらっしゃるので、蓄積してきたナレッジ、市民力を活かした公民連携も必要だと思っています。その上で、例えばエリアマネジメントなどの手法も付していくべきだと思っています。

それから連携と言う意味では、歩くというウォーカビリティがまず大事なことです。全員が歩けるわけではない中で、また遠距離から人が集まる中で、どういう形で広い意味でのモビリティを確保していくのか、モビリティの面からも各主体が連携できる仕掛けがなければ、再開発だけやっても拠点性を発揮できないと思われます。

先々週、ヨーロッパに出張しており、フランスのディジョンというまちを訪れました。人口15万人くらいで、鎌倉と同じ古都であり観光都市で、ブルゴーニュワインやマスタードの発祥のまちであり、カシスの産地ですが、まちをカシス色で統一し、カシス色のLRTやバスが判りやすく運行され、非常に素晴らしいモビリティを保持している、良いまちという印象を受けました。それも連携のためのインフラです。

それから、3番目として、時代の変化を見据えたうえでの施策が大事だと思っています。今、SDGsの議論も出てきましたが現代では価値観も加速度的に変化していきます。例えば深沢のまちびらきの頃には、おそらく東京から名古屋まで、あるいは大阪までリニアが通って、東京から大阪まで1つの大きなメガシティになる。

これは国土形成計画にも書いてありますが、その中で、今まで鎌倉は東京という巨大都市の近郊でしたが、今後は東海道メガシティという超巨大都市の近郊になるわけです。その環境の中で、どういったまちをつくっていくのか。おそらく、その時代はリニアだけでなく、キャッシュレスとか、ソサエティ5.0といわれるような社会になっているはずで、そういう時代のキーワードと、将来へ向けた鎌倉市の施策がどういうふうに関係してくるかを常に意識しながらまちづくりをやっていく必要があると考えています。

（佐久間委員長） 非常に広範囲にわたってご意見を頂きました。一点質問したいのですが、先ほどのフランスのモビリティの話は具体的にはどういった内容なのでしょう。

（入江委員） ディジョンというところは美食のまちでして、カシス、ワインのまち、またマスタードソース発祥の地ですが、その中でもカシスで売っていくことを決め、まちをカシスの色であるピンクにしています。その中でモビリティがあって、BRTというバスを張り巡らしていましたが、一方でそのバスが渋滞してきたので、バスよりもトラムの方が大量輸送できるので、トラムと連動する形でバス網を再構築して、その補助として自転車、シェアサイクルもあり、その全ての公共交通を判りやすく色をピンクにし

ています。電車もピンクならば、バスもピンク、シェアサイクルもピンク、ピンクのものがあると交通です。そして、夜になるとまちがピンクにライトアップされる。そうするとまちとして色がピンクだということを打ち出して、それに沿ってトータルデザインが活かされた形で風景があり、そのデザインと調和的に交通網も整備されています。また、利用者は一枚の切符を買えばその一枚で電車も乗ればバスも乗れる、好きなところで乗ったり降りたり出来るという形です。だから気軽にまちを散策できるということがあります。古都ということ、人口も同じ程度ということもあり、参考にと紹介した次第でございます。

(日高委員) ディジョンの位置はどのあたりですか。

(入江委員) パリからスイスに行く途中の、フランスの真ん中あたりです。

(佐久間委員長) 今の話、大変面白いものですね。普通は、鉄道なら鉄道、それ以外の交通なら交通だけの話になり、縦割りの話になってしまいがちですが、そのまち全体のイメージカラーを合わせ、全部統一して、さらに魅力を増すというかたちは役所的に考えてもひとつのセクションで出来るわけではないので、先ほど話のあった意味の連携、あるいは市民力との連携を含めて考えていきたいような大変面白いまちづくりのモデルだと思います。

では、続いて今日欠席されているそれ以外の委員(増井委員、関根委員)のコメントについて、事務局で預かっていると言うことですので、ご紹介頂きます。

(事務局) <増井委員のコメント紹介>

深沢地区を、大船、鎌倉地区と並ぶ、鎌倉市の新たな拠点として整備して行こうという市の意気込みを感じています。

市役所の移転と消防本部や体育館、グラウンドが一体的に整備され、強固な防災拠点機能を形成することが期待されています。深沢地区全体においても災害に強いまちづくりが重要なキーワードであり、インフラの強化はもちろん地区内で災害時の機能分担・連携を検討していくとよいと思いますし、それが特徴ともなるのではないのでしょうか。

また、公共サービスの機能や空間も、利用者の利便性や将来のニーズの変化に柔軟に対応できることが必要との議論があり、市役所と民間施設間で融通しあえることできるようになると良いと思います。

当該地区は実際には民間の土地が大部分を占めるので、行政がコンセプト、方針、ゾーニングを決めていても、民間事業者にとって価値があるものでないとならず、いかに市が全体をマネジメントしながら、民間の協力を引き出していけるが重要になると思います。PPPは常に開発進化中の面があり、民間事業者も実績を積みながら新しい仕組みづくりに挑戦しています。行政も、オガール紫波の例では、積極的に市が意志を持って動いたことにより、新しいスタイルを作り上げました。今回の事業でも市が官民連携のまちづくりを行うと、宣言して、市の姿勢をアピールしてもよいのではないのでしょうか。

深沢地区において、全体像を検討すると同時に、具体的にどんな新しい機能、サービス、活動、空間が考えられるのか、市民が期待するのか。早い段階からアイデアのピースをたくさん集めて、検討していけると良いように思います。まとまった平坦な土地を生かし、市内の他の地区ではできない新しい仕組みや技術を取り入れながら、成功モデ

ルは市全域に展開すると行った、他地区とのつながりや実験的機能もあると良いと考えます。

今後、プロポーザルなども実施すると思いますが、積極的に情報をオープンにしていくとよいのではないのでしょうか。

<関根委員のコメント紹介>

防災・減災の観点から言えば、今後は施設整備というハードウェアの対策だけで住民の安全を確実に確保できるというわけにはいかなくとも考えるべきかと思います。このような時代にまず望まれるのは、住民自身が常日頃から自然災害のリスクを知り、その備えを進めるとともに、いざというときには自らの命を守るために避難しなければならない事もありうることを理解することが重要です。まちづくりを考える上ではさまざまな点が重要であることは言うまでもありませんが、住民の災害に対する意識を変え、個々が行動を起こすきっかけとなるような仕掛けを考え合わせるとよいでしょう。この際、安全と安心とが両立するとは限らないことを念頭におき、安全のためには多少の不便は受け入れるという姿勢が大事になるかもしれません。市庁舎の移転・施設整備に当たっては、少しでも被災する可能性が低いこととあわせて、仮に被災したとしてもその影響は小さく、できるだけ早くその機能を取り戻せることも重要と考えています。まちづくりに関しても同じことが言えるのではないかと思います。

(佐久間委員長) それではいま委員の先生方からご意見、コメントがありましたが、それに関して質疑あるいは、事務局が補足して頂いていることに対して確認、質問はありますでしょうか。

(大木委員) すごく瑣末なことですが、平成 29 年度の検討の 7 つコンセプトが資料 1 の 3 ページにあがっていますが、これは『セーフ』は『セーフティ』ではなくて、なぜ『セーフ』なのでしょう。形容詞と名詞が混ざっている印象があります。

(事務局) ご指摘の通り、形容詞と名詞が混在していますが、なるべく分かり易い単語で表現を目指したところ、これらになったというところでございます。

(佐久間委員長) 簡単に言うと分かり易いカタカナ英語にしましたと言うことでしょうか。

(大木委員) 学校でもセーフティ教育と呼ばれるものをやっている学校もあるので、一般の方にはセーフよりセーフティのほうが馴染んでいるのではないかと思います。

(事務局) こちらの資料のまとめですが、昨年度こちらの検討の中で、ひとつのケーススタディとしてまとめたものですので、そういったご指摘も含めて、今回深めていって頂いて、より具体的に分かり易く、ブランディングに役に立つように、そういったところの深掘りもぜひして頂ければと思いますので、ご意見として受け止め、重ねていきたいと思っています。

(佐久間委員長) そういったご意見があればぜひ皆さんもお願いします。

先ほど大木委員の発言について、利他的な行動をして結果として自分の命が助かるというのは、色々なところでケースとして、すでにあるのでしょうか。

(大木委員) そのような概念をまとめて言い切っている論文は無いですが、薄々感づいている人たちが行っている防災教育が結果的に成功しているという例はいくつもあります。ほぼ全ての自治体が学校を持っていますが、例として一番有名なのは釜石市で、高台に避難するというのを、小中学生が助かったのもそうなんですが、大人で亡くなった世

代をみると、小中学生の保護者世代はやはり少ない。それは子ども達が家に帰って避難することを親と約束していたわけですから。実はその避難した大人たちに先生が、あるいはNHKさんなどもヒアリングなどを行って言われているのが、津波は来ると思ってなかったけれど、子どもとした約束を大人自らが破ることはできなかったから避難した。結局そのときの判断で避難するべきときだと判断するのは非常に難しく、これは心理学でも言われていますが、緊急事態に正常性バイアスがかかってしまって避難しないという、避難を先延ばしするような理由を見つけるように人間は出来ています。その場での判断ではなくて、事前に避難行動を約束しておいた、そちらの価値の方を重んじて避難するという、人のために、約束を守るために避難したということが功を奏したことがありました。

あとは避難した人を見るというのが最大の防災情報です。防災無線などではなくて、声掛けがあったから避難したということも言われています。そう考えたときに、観光客に「どういったサインが分かり易いか」「高台はどこかということはどういうサインが分かり易いか」と聞いた研究はたくさんありますが、良いとされたサインがあっても、すべての住民が反対に逃げていくのを見れば、多分住民の真似をしたいと思います。だから私たち自身が指標となって高台へ行こう、正しい避難場所へ行こうというふうにする方が結果的に全員にとって良いと思います。それを掲げた自治体のことは、いくつか伺っています。

(佐久間委員長) 非常に分かり易く具体的な説明ありがとうございます。本当にそういったまちにできればと思います。そのためには防災教育含めて、そういった日頃の地道な積み重ねが、まち自体のレジリエンスを強化していくと思いました。

この他ありますか。

(日高委員) 先ほど入江委員がおっしゃった縮小社会下の大型再開発であるから今既にあるものを大事にという話がありましたが、一方で今回の深沢地域は更地をベースとした再開発です。どちらかというと大船、藤沢文化圏でもあり、いわゆる古都、旧鎌倉エリアから、少し隔絶された感じもあります。更地なのでまちの特徴が表しにくく、取組みが難しいところがある気がします。なにかそこに関してご意見をお持ちでしたら教えて頂けますか。

(入江委員) 私も鎌倉に住んでいるわけではないので、あまり土地勘があるわけではないですが、鎌倉駅周辺と深沢地域は違います。鎌倉駅周辺はひとつの拠点であって、大船駅周辺もまた違う形で拠点となっていて、三極体制になっていると思います。鎌倉市として、歴史や文化のみならず、企業のOB、OGが多くいるのであれば、そういった民度の高い方がたくさんいると思いますので、そういったことも含めて、何があるのかを持ち合わせていて、という意味合いです。

(日高委員) 今までそういった議論を積み重ねてきているところです。私も二週間前にアメリカのポートランドを3日ほど視察してきました。オレゴン州のまちで、アメリカで一番住みたいまちと言われているようです。何が良いのかと言いますと、まず歩行者に優しいということ、また自転車に優しい、住みやすいということが色々言われているわけです。

都市計画的には色々細かい工夫があって、まちのグリッドが60mグリッドで小さく、

信号が 20 秒程度で小刻みに変わるようになっています。歩行者が待つ時間が短い。そして旧市街地は、車は徹底的に一方通行になっていて、車ではすごく走りにくい、自転車にも乗っていましたが、自転車や歩行者は本当に過ごしやすいように出来ていると思いました。ウォーカブルなまちと言うのは、甲乙ハッキリしていて、歩行者が最上位にあって、次に自転車、次に小さめのモビリティ、バイクですとか電動スクーター、電動車いすなど、そしてその下に車がくるという、優先順位がとにかくハッキリしています。それが市民に共有されており、全員がそれを前提に行動するという習慣が染み付いている印象がありました。昨今、日本人も近いメンタリティを構成しつつあるなと思ひまして、意外とこの深沢地域の新しいまちでも共有されることが出来るだろうと思いました。

ポートランドという、作られてからまだ歴史が浅いまちで、今面白いと思われているものは、「小さいもの」が多いと思います。小さなマーケットであるとか、小さいカフェであるとか、まち中の日常的な小さいイベントだったりとか、ポケットパークだったり。コンテキストが何も無いまちを今から作る中で、今まで議論してきた延長で私なりに考えたのですが、小さいものを大事にするまちづくりというのがおそらくキーになってくるだろうと思っています。いつも行政のプロセスで言えば土地利用計画とか、かなり大鉈を振るうところから始めてだんだん小刻みにしていくという流れがあるわけですが、そうではないまちの作り方というのがおそらくあるんだろうと思いました。

具体的に言いますと、例えば真っ白な敷地の中に何か作る時に、今入江委員がおっしゃったことに近いですが、コンテキストになるようなものが無い中で何が出来るかと言うと、「持ち寄る」という発想があるかなと思っています。ステークホルダーそれぞれが何かを持ち寄る。市役所、消防署が最初に深沢に行くわけですね。そうすると市役所や消防署がまちに提供できるもの、将来に渡ってまちに提供できるものはなんだろうかと考えて、そこに何か普段やらない一手間をかけることができないかということです。あるいはショッピングセンターが出来るとしてそれがまちに提供できるものとか、住宅が出来るとしてそれがまちに提供できるものというのを、それぞれが提供して行って、持ち寄りパーティーみたいな手法でまちをつくる。そういった小さい工夫を持ち寄るデザインが大切だと思います。ちょっとしたオープンなラウンジですとか、なにか特別なサービスだとか。

柏の葉で言いますと、街路樹の里親制度というものを最初にやりまして、八重桜を街路樹に植えているんですが、自分の敷地の前の桜は自分が里親なので、自分で面倒を見るという制度をつくりました。街路樹の手入れの費用も自分達で出すというかたちでの街路樹のある景観をつくるための持ち寄りを行っているわけです。そうしてできた歩行者空間をUDCKというまちづくり組織が管理を行っていて、そこで月に一度マーケットなどをやったり、ちょっとした建物を仮設で建てることのできる。最近では高架下で屋台なども営業するようになりました。街路を使い易い仕組みがそこにあるわけですが、それもある種公共スペースを形成する活動を持ち寄る仕組みを作るということです。つまり白紙のところに何か描くときに、ある種シェアの発想を入れ込む。コミュニティ自体がシェアリングの発想に基づいて、小さいものを持ち寄りな

がらまちを作っていく仕組みというものを、例えば今の段階で何か織り込めないか。時間差で市役所が建ったりとか、その後何かが出来たということになるわけですが、その時にプレーヤーが増えるごとに段々まちが豊かになっていく仕組み、それを要求するようなフレームワーク、制度を作れば良いんだと思います。

どうしても大きなグリッドで、先程の話にあった J A M S T E C がある追浜のような、埋立地のような様相を呈し易いまちだと思うので、いかに小さいこまを作るか、細やかなサービスをここに根付かせていくかということが、もしかしたら今考えることのひとつなのかなと、ポートランドを見て思い、発言しました。

(佐久間委員長) 非常に面白いアイデアだと率直に思いました。ポートランドは全米で一番住みたいまちとよく言われますけど、日高委員が言われた色々な施設ができるという中で、そこから少しずつ持ち寄ってまち自体を豊かにできるような仕組み、仕掛けをこの深沢のまちに入れていくというのは、非常にユニークなアイデアだと思いました。

柏の葉の里親制度など、非常に実例を多く上げて頂きましたが、それよりもさらに将来を見据えて上手い仕組み、仕掛けを入れていく、それは出来るんじゃないかと思っています。

当然委員会の中でも議論して、そういった仕掛けをぜひ入れていきたい、議論していく中で煮詰めていければ、最終的なレポートの中に書けるものだと思えました。

今の話で何かあればどうぞ。

(入江委員) 今の話に関連しまして、豊かな公共スペースとか、ウォーカブルなまち並みというものは、車を排除することで可能になると思います。車が行き交うまちはウォーカブルではないということです。そのためには、更地ならではの出来ることはあるはずです。例えば、まちに用事があって来る人はいいいですが、通過交通はまちを歩く人にとっては何のメリットもないので、通過交通をできるだけ排除するような道路作りですね。つまり北から来た人は南に抜けられない、西から来た人は東に抜けられない。そのための仕掛けとして一方通行だとか、ボラードという地面から腰の高さまでの鉄柱のようなものが時間差をおいて、5時から7時まででは出てくるけど、それ以外は下がるとか、そういう仕掛けがヨーロッパではあるので、そういうものを駆使して、通過交通を排除して、歩行者中心にしていくことが考えられると思います。

一方、車で来る人もまちの入口までは来れるけれど、そこに駐車場を用意して、まちの中心には歩いていく、あるいはどうしても入りたい人は、駐車場の金額を高くして、その分払ったら入れるということもできると思います。そういう意味で、ウォーカブルなまちというのは、車で移動しすぎないまちだと思います。

(日高委員) この計画は資料1の2ページにあるとおり、シンボル道路というものが真ん中に通っていますが、まちの中心が通過交通で分断されることになり、快適なまちになりにくいのではないかと考えています。それと北側は外周道路が通っていません。昨年度の検討から申し上げていたのですが、外周道路を通して通過交通を街区内に入れない。真ん中のシンボル道路をできればペDESTリアン化して、外周道路からアクセスするクルドサックのまちにしたほうが、今後縮小社会初の再開発としては特徴が出るし、本当にウォーカブルなまちを実現するための一番のフレームになるのではないかと思います。

シンボル道路の交通を時間でコントロールするトランジットモールにするとか、シンボル道路の扱い自体も色々言われていたんですが、私としてはトランジットモールが日本では成功しないような気もしてしまっていて、できるだけ思い切った提言ができないかということで、外周道路を作って、シンボル道路はペDESTリアン化ということをお願いしています。

(佐久間委員長) 今、少しありましたが、道路と言うのは必ずしも我々がこうすると言えばそうなるものではなくて、当然ある程度のかたちに対しては、市と警察が交通行政の視点から協議をして、その理解を頂かないとできない部分がありますので、そういった中でコンセプトと現実のかたち、どのあたりで折り合うか、その点についても今後委員会でしっかり議論していきたいと思っています。

【次第3 (5) 深沢地区の防災に関する事項について】

(佐久間委員長) それでは、時間も押してきましたので、先程、防災についてもこの委員会の中でという話がありましたが、防災に関しては極めて専門的な見地からの検討が必要であると考えるところでありまして、施行規則の第6条に部会が設置できるという内容がありますので、部会をぜひ設置してはどうかと考えるところですが、委員の皆様いかがでしょうか。

(各委員) 了承

(佐久間委員長) それでは、部会を設置して、防災の面については特に部会で検討して委員会の方に返して頂きたいという形にしたいと思います。部会の委員につきましては、防災の専門家であります大木委員と関根委員にお願いしたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い致します。

(大木委員) 了承

(佐久間委員長) ありがとうございます。事務局のほうで関根委員のご意向も確認頂けているということでしょうか。

(事務局) はい。

(佐久間委員長) ではその二人にお願い致します。

部会長については、今回特に浸水についてお詳しいという部分もありますので、浸水の専門家でもある関根委員に部会長をお願い致します。

それでは大木委員、宜しくお願いします。

議事としては、ここまでですが、何かこの際、ご発言のある方はよろしくお願い致します。

(事務局) 只今、部会についてお話がありましたので、若干部会について事務局から補足させて頂きます。

(事務局) 資料3及び深沢の浸水についての説明

<関根委員からのコメント紹介>

津波は極めて高速度で押し寄せ、人や建物に大きな力を及ぼしますので、建物や自動車すら押し流し、短時間で人命を奪う可能性が高いと言えます。これに比べれば、豪雨による洪水や浸水の被害は小さく、堤防の近くを除いて水の流れも穏やかである場合がほとんどです。このため、仮に被災することがあったとしても、後者の方が比

較的速やかな建物の機能回復が見込めるはずであり、市全体が受ける被害の長期化を和らげることができると思います。市の本庁舎は、災害発生後の司令塔としても効果的に機能するものでなければなりません。このため、本庁舎に限らずまちのあり方を考える上では、津波と豪雨による洪水・浸水とを同列に議論することはできないと考えるべきでしょう。

現在、全国で公表が進んでいるハザードマップは、想定される最大級の外力を決めて計算されたものですが、降雨量などの外力をどのように定めるかはとても難しく、今後しっかりと科学的な検討を要するものと受けとめています。現段階の数字は、大きめの設定になっていると考えるのが一般的ではないでしょうか。これは、東日本大震災時に、多くの科学者は「もっと大きなリスクを伝えておけば少しは被害を小さくできたのではないか」という思いを抱いていたと思います。上記のように大きめの設定をしているのは、このような反省を踏まえてのことかと思います。ここで想定されたようなリスクに遭遇することはありえないとは言えませんので、この情報をしっかりと受けとめておく必要がありますし、万一そのような事態になった場合には、速やかに兆候を捉えて避難することが重要です。その一方で、建物やインフラの整備に当たっては、このように計算されたリスクに対しても確かに安全であるようにしなければならないと考えるのは現実的ではないように思われます。経済的に負担となることとあわせて環境を大きく変えることにつながる場合があるからです。

上記の意見は、2015年の鬼怒川の堤防決壊の後、国の審議会において新しい水防法に関わる議論に加わって以降考えてきたことです。当時から、今後起きる可能性のある最大級の豪雨や津波の規模などをどのように定めるのかという点が議論になっていますが、未だに答えは出ていたとは言えません。より大きな外力を対象とし、これに対して確かに安全なまちづくりができることが望ましいのですが、その想定と、経済性や環境上望ましい姿などについてどこかで折り合いをつけなくてはなりません。現在の議論の的となりえる「最大想定規模 632mm の降雨量」については、これまでに観測された豪雨に比べてかなり大きな数字であることを考えると、これに対しては引き出された浸水リスク情報に大きく引きずられないようにした方がよいと思われます。

(佐久間委員長) ただいまの内容を踏まえて、大木委員なにかございますか。

(大木委員) 気象災害と地震災害の最大の違いは、事前に情報があるという部分だと思います。

地震は抜き打ちですが、気象災害についてはかなりの精度で予測が出来ます。ただ、にもかかわらず避難しないというのはなぜかということに注力しなければいけないわけですが、そういった情報を共有する、発信するということで人的被害に関しては、仮に浸水が本当に起きたとしても逃れることは出来ると思います。ですので、これを重大に捉えてまちづくりをやめるべきだというようなことはあってはならないと思います。

先ほど日高委員から、持ち寄るという言葉がありましたが、実は防災でもそれが効果があるということが言われています。ジョインアンドシェアというものです。例えば、天気を報告したり、ヤフーなどである機能で今晴れと言っている人が6人、雨と言っている人が0人ですなどが出ますが、アメリカ、イタリア、ニュージーランドなどでは地震の揺れも報告しています。日本のように震度計のばら撒きに予算をとれな

い国は、本がたくさん倒れたとか、壁にクラックが入ったとか、震度という概念が無いので体感震度がいくつと報告できない代わりに、30 数項目のアンケートをわざわざボランティアが答えて、それを統計的に処理して、10 人が壁にクラックが入ったと言っているのを震度 5 でしょうということを地図上に出して、それが沢山集まるほど精度は高まりますが、イタリアではそれがきれいに地盤情報を反映しているんですね。隣の地域なのに川のこっち側は高めに報告していて、ほんとにそのとおりになっています。そういうことをやると防災意識が高まっていきます。無意識の間に彼らにとっても実はすごくいいことがあって、こういうのは実は教育学でも言われていて、正統的周辺参加理論と言われていますが、自分が主体的にジョインして、みんながジョインして得られた情報をシェアすることで主体性が高まって訓練への参加率が高まるとか、避難率が高まるとか、だからここでもそうやって持ち寄ると言うことが、雨の音がここまで聞こえたら自分は避難するよというような考え方を共有する。その方だけでなく、この地域で共有しているとその地域全体での避難率が高くなる、そういうことはすでにやっているところもあります。

先ほどの考え方をソフトの防災でも応用して、そういったことが出来る、自分の情報なりを持ち寄ることで、自分自身も情報量を得られるし、みんなにとって安心なまちになる、そういったことも出来るかなと思います。

(佐久間委員長) ありがとうございます。

ジョインアンドシェアというのは、このまちを考える中ではキーワードになる言葉だろうと思いました。

それでは最後に次第の 4 について、事務局からご説明をお願いします。

【次第 4 その他について】

(事務局) 次回委員会を 1 月後半に予定していること及び議事録について、後日委員の皆さんに確認することを説明。

(佐久間委員長) 今の事務局の説明に何かございますが。

無いようですが、本日県からオブザーバーとして金井統括官に来て頂いていますので、今回の委員会についてご意見等があればお願いします。

(神奈川県金井氏) 皆様の議論に資するように、なにかありましたら資料提供、または県の考え方などをご説明させて頂きたいと考えておりますので、よろしくお願い致します。

(佐久間委員長) ありがとうございます。積極的に協力してくれるということですので、各委員の皆様も資料等、ご要望がありましたら、どうぞよろしくお願い致します。

それでは、お時間になりますので、以上をもちまして本日の委員会を終了したいと思います。長時間にわたり、皆様ご苦勞様でした。ありがとうございました。

以上